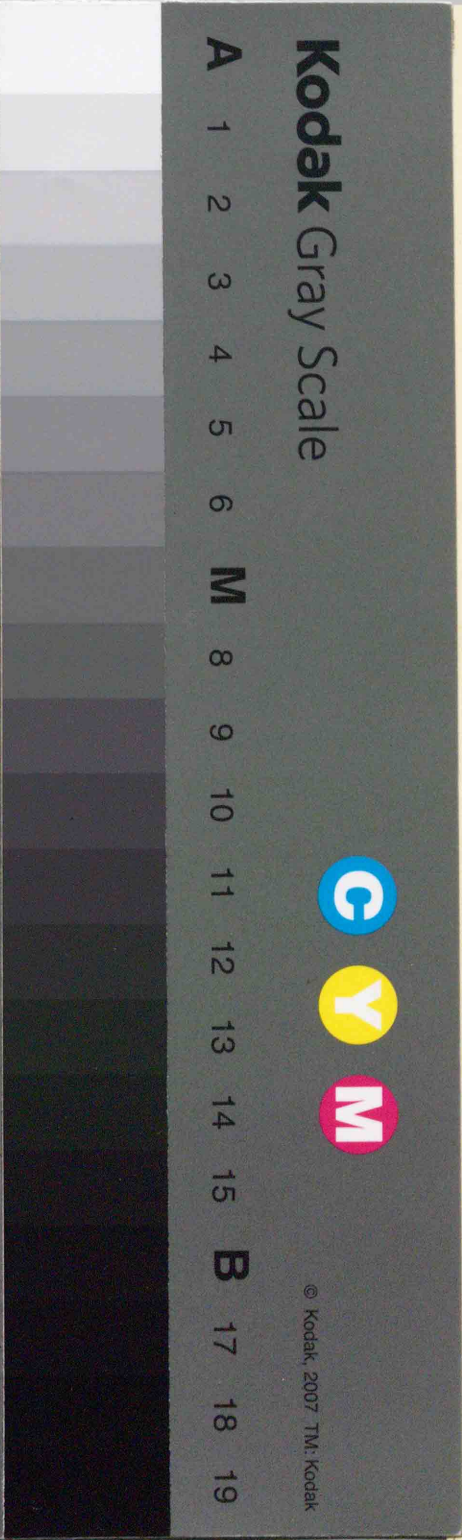
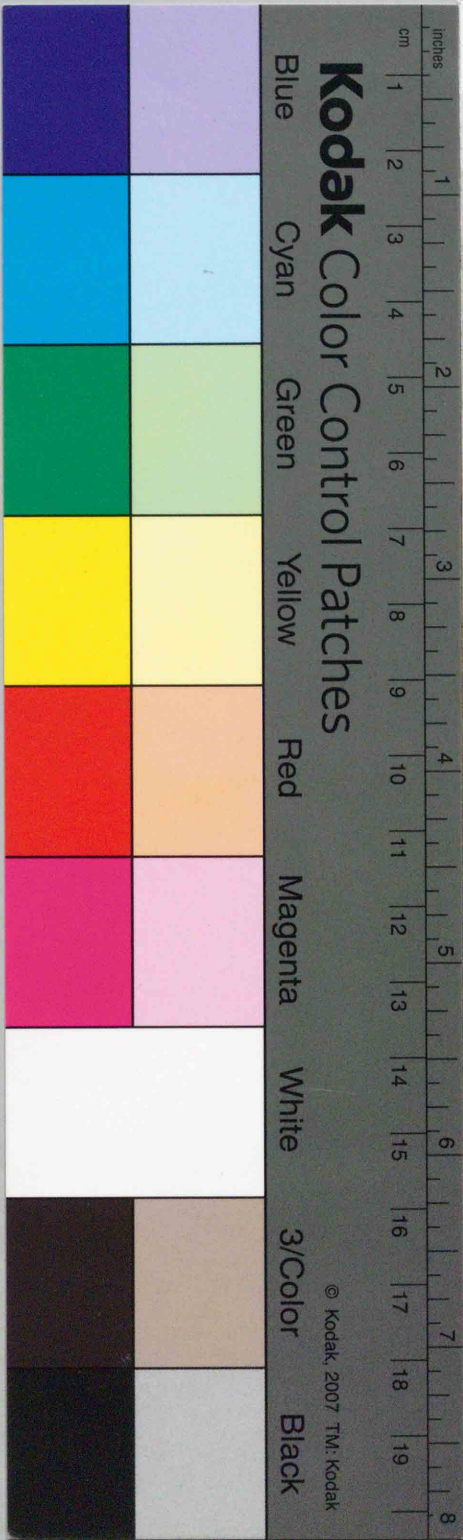
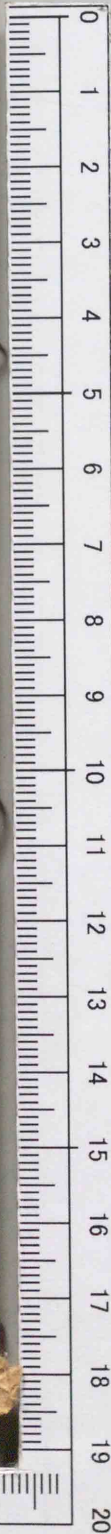


中國
國文教科書
修正八版
卷四

375.9
Y019
資料室



41801

教科書文庫

4
810
A1-1912
200030 2003



資料室

375.9
Y019

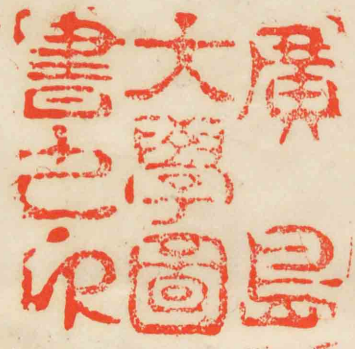
版八正修
濟定檢省部文
書科教科語國校學中 日四廿月二十年元正大

吉田彌平編

卷四

中國文教科書

東京 光風館藏版



中國文教科書卷四

目次

一 詔書	……………	一頁
二 皇室に關する敬語	……………	四
三 櫻井の訣別	……………	二
四 勿來の關(短歌)	……………	三
五 動植二物配合の美(口語文)	……………	三五
六 内藤鳴雪に贈る(候文)	……………	三
七 川中島(琵琶歌)	……………	三
八 人の間に答ふ	……………	六
	尾崎行雄	

目次

一

九	利根川の秋曉(口語文)	德富蘆花	三
一〇	秋の夜	幸田露伴	五
一一	荒城の月(新體詩)		六
一二	わが幼時	新井白石	四〇
一三	岐路(口語文)		四六
一四	境遇(西諺)		五三
一五	岩倉右府その一	井上	毅 垂
一六	岩倉右府その二	井上	毅 六
一七	八道の山(新體詩)	大町桂月	七
一八	浦鹽より(候文)	太田覺眠	壹
一九	武藏野	國木田獨步	六

二〇	年中行事	物集高見	八
二一	クリスマスと新年(口語文)	巖谷小波	七
二二	鴻門の會	大町桂月	六
二三	公子の躰方を申し遣はす(候文)	徳川齊昭	一〇三
二四	他山ノ石(格言)		一〇七
二五	乃木將軍(新體詩)	森 鷗外	一〇八
二六	武士道の權化その一(口語文)	井上哲次郎	一四
二七	武士道の權化その二(口語文)	井上哲次郎	一三



中國國文教科書卷四

一 詔書

朕東洋ノ平和ヲ永遠ニ維持シ帝國ノ安全ヲ將來ニ保障スルノ必要ナルヲ念ヒ又常ニ韓國カ禍亂ノ淵源タルニ顧ミ曩ニ朕ノ政府ヲシテ韓國政府ト協定セシメ韓國ヲ帝國ノ保護ノ下ニ置キ以テ禍源ヲ杜絶シ平和ヲ確保セムコトヲ期セリ

爾來時ヲ經ルコト四年有餘其ノ間朕ノ政府ハ銳意

韓國施政ノ改善ニ努メ其ノ成績亦見ルヘキモノアリト雖韓國ノ現制ハ尙未タ治安ノ保持ヲ完スルニ足ラス疑懼ノ念毎ニ國內ニ充溢シ民其ノ堵ニ安セス公共ノ安寧ヲ維持シ民衆ノ福利ヲ増進セムカ爲ニハ革新ヲ現制ニ加フルノ避ク可ラサルコト瞭然タルニ至レリ

朕ハ韓國皇帝陛下ト與ニ此ノ事態ニ鑑ミ韓國ヲ舉テ日本帝國ニ併合シ以テ時勢ノ要求ニ應スルノ已ムヲ得サルモノアルヲ念ヒ茲ニ永久ニ韓國ヲ帝國ニ併合スルコトトナセリ

韓國皇帝陛下及其ノ皇室各員ハ併合ノ後ト雖相當ノ優遇ヲ受クヘク民衆ハ直接朕カ綏撫ノ下ニ立チテ其ノ康福ヲ増進スヘク産業及貿易ハ治平ノ下ニ顯著ナル發達ヲ見ルニ至ルヘシ而シテ東洋ノ平和ハ之ニ依リテ愈其ノ基礎ヲ鞏固ニスヘキハ朕ノ信シテ疑ハサル所ナリ

朕ハ特ニ朝鮮總督ヲ置キ之ヲシテ朕ノ命ヲ承ケテ陸海軍ヲ統率シ諸般ノ政務ヲ總轄セシム百官有司克ク朕ノ意ヲ體シテ事ニ從ヒ施設ノ緩急其ノ宜キヲ得以テ衆庶ヲシテ永ク治平ノ慶ニ賴ラシムルコ

トヲ期セヨ

御名御璽

明治四十三年八月二十九日

内閣總理大臣侯爵 桂 太郎

(以下各大臣副署略す)

崇一崇

我が皇室、儼として萬民の上に位し、人民を視給ふこと慈母の赤子に於けるが如し。故に、國民尊崇の念溢れて言語の上にもあらはれ、皇室に關する敬語となれり。

二 皇室に關する敬語

稱一稱

皇室に關する敬語に種々あり。皇室典範に定められたるものあり、古より慣用せるものあり。皇室典範には、その第十七條に、「天皇太皇太后皇太后皇后ノ敬稱ハ陛下トス。同十八條に、「皇太子皇太子妃皇太孫皇太孫妃親王妃親王妃内親王主王妃女玉ノ敬稱ハ殿下トス。」とあり。古より慣用せるものには、その類頗る多し。今、序を逐うて之を述べん。

帥一帥

天皇、天子、皇帝、陛下、至尊、主上、上様、御上、今上、御門、現津御神、大元帥は皆天皇を稱し奉る語なり。令に、天皇ハ詔書ニ稱スル所、天子ハ祭祀ニ稱スル所、皇帝ハ



輦
輦

華夷ニ稱スル所、陛下ハ上表ニ稱スル所と見えたり。大元帥は陸海軍を統帥し給ふ上に就きて申し奉る。乘輿・鳳輦・鸞輿は御輿なり。車駕・龍駕は御車なり。天皇の行幸を「車駕某の地に行幸し給ふ」といひ、また古制に、天皇の服御し給ふ御物を「乘輿御物」といふが如きは、これ天皇を直ちにさすを憚りて、その車駕乘輿に託していふなり。行幸臨幸は天皇の皇居を出でて他所に行き給ふをいひ、その皇居に還り給ふを「還幸・還御」といふ。鹵簿は車駕の次第なり。三后皇太子・同妃の他所に行き給ふをば「行啓」といひ、その還

裏
裡

り給ふをば「還啓」といふ。

敕
勅

宮城・禁裏・禁中・禁闕・禁廷・禁門・鳳闕・御所・内裏・朝廷・九重は皆皇居を稱する語なり。他所に行幸し給ひて、暫しおはします所は「行宮」又は「行在所」といふ。又他所にとゞまり給ふを「駐蹕・駐輦」といふ。詔書・敕書・上諭・敕語・敕諭・敕命・綸旨・綸言・宣旨は皆天皇の御言宣なり。明治四十年に公式令を定めて、詔書・敕書・上諭等の別を明かにせらる。皇族の命をば「令旨」と稱す。叡感・天聽・天覽・叡覽・叡慮・聖慮・宸慮・宸襟は、天皇の御感・御聞見・御思慮を稱する語なり。乙夜の覽とは天皇

御政務の御暇に書見し給ふをいふ。乙夜とは夜の二更、今の十時頃なり。天位・宸極・高御座・大御座・九五の位・寶祚は天皇の御位なり。九五とは易經に出てたる語なり。天皇崩じて、皇嗣・祖宗の神器を承け給ふを踐祚といふ。即位の禮及び大嘗祭は、大喪果てて後京都にて行はせ給ふ。聖德・聖鑒・聖威・天威・聖恩・天恩・乾德は天皇の御德に關する語なり。皇后の御德をば坤德といふ。天顏・龍顏・玉音・玉步・玉座・使殿は天皇の御容貌・御音聲・御歩行・御座席を稱する語なり。政治に勉勵せさせ給ふを宵衣旰食といひ、出入し給

鑒鑑

昨

天位、宸極、高御座、大御座、九五

寶寶寶

ふを出御入御といふ。袞龍の模様ある御衣を袞龍の御衣といひしより、常の御衣裳のことにも轉用す。欽定裁可は御裁定なり。寶算・聖壽は御齡なり。御宇・御治世は御世なり。宸翰・宸筆は御書なり。御盃を天盃といひ、御詩歌を御製といひ、三后以下のをば御歌御詩といふ。天皇の御機嫌を天機といひ、三后には御機嫌といふ。東宮・春宮・儲君・儲貳は皇太子を稱し、竹の園生・竹園・帝葉・金枝玉葉は皇族を稱する語なり。皇子孫の生れさせ給ふを降誕といひ、皇女の臣下に嫁し給ふを降嫁といふ。

妄—忘

此等の敬語は我が固有の語に漢字をあてたるあり。現津御神の如き是なり。或は漢語をそのまま用ひたるあり。陛下至尊の如き是なり。或は古用ひて今多く用ひざるあり。内裏禁裏の如き是なり。或は古になくして今あるものあり。大元帥の如き是なり。かく様々なれども、要するに、均しく皆尊崇の敬語なるなり。これを外國語に比するに、固より日を同じくして語るべからず。されば、我等國民たるものは此等の敬語を常によく心得置くべし。濫稱妄用して不敬に陥るがごときことあるべからず。

(國語教程)

延元元年五月。

三 櫻井の訣別

正成^{*}是を最後の合戦と思ひければ、嫡子正行が今年十一歳にて供したりけるを、思ふやうありとて、櫻井の宿より河内へ還し遣はすとて、庭訓を遺しけるは、獅子子を産みて三日を経る時、數千丈の石壁より之を擲ぐ。その子獅子の機分あれば、教へざるに中より跳ね返りて死することを得ずといへり。況や汝、已に十歳に餘りぬ。一言耳に留らば、我が

況—况

巳一己一巳

教誡に違ふことなかれ。

今度の合戦天下の安否

嗚呼盛楠子巳墓



楠正成銅像及湊川の碑

且の身命を助らんために、多年の忠烈を失ひて降人に出づることあるべからず。一族若黨の一人

と思ふ間、今生にて汝が顔を見んこと、これを限と思ふなり。正成已に討死すと聞きなば、天下は必ず將軍の代になりぬと心得べし。然りと雖も、一

周の人、射を善くす。漢の高祖の危を救うて自ら死す。

勿一勿

も死に残りてあらん程は、金剛山の邊に引き籠りて、敵寄せ來らば、命を養由が矢さきに懸けて、義を紀信が忠に比すべし。是ぞ汝が第一の孝行ならんずる。

と申し含めて各東西へ別れけり。(太平記)

四 勿來の關

みちの國にまかりける時、なこそその關にて花の散りければよめる、源義家吹く風をかころの關と思へども、

縁書

みちもせに散る山櫻のふ。

みちのくにまかりけるに、白河の關に

てよめる、

能因法師

都をば霞とともによもしうど、

あき風ぞ吹く白河のせせ。

關路千鳥といへることをよめる、

源兼昌

いはぢ鳥のよふ千鳥のなく聲に、

幾夜ねぎぬ、須磨の關守。

五 動植二物配合の美

三 好學

植物と動物との間には自然の關係を持つて居るものが多い。これは植物の生存に必要なためのもあり、動物の生存に便利なためのもあり、又動植二物が互に相利するため自ら關係が出来て居るものもある。又それほど深い關係でなくても、或植物と或動物とは多く同一の場所にあるために、其の一方を見ると直ちに其の他方を聯想することもある。其の外種々の原因からして、動物と植物とは理想的に配合されることも随分多い。

互互

因一因

佳一佳

花と昆虫との關係は至つて親密なもので、花は昆虫の媒介によつて花粉の傳達を圖るのである。その媒介をさせるためには、花の形や色が奇麗になり、又は佳い香がして、遠方から知ることの出来るやうになつて居る。それで美しい花があると、必ず昆虫が其の傍に来る。

ヤンギヤ

春先、菜圃に行つて見ると、白い蝶や黄色な蝶が彼方此方に飛んで居る。蝶と菜の花とは何時でも聯想されるもので、春さきまだそんなに暖くない頃であるから、菜の花のやうな黄色な、淡泊な花に同じ色又

季一季

釣一釣一釣

は白色の蝶が来て飛んで居るのは、自ら季節にかなつて居るやうに見える。それから段々氣候が暖かになつて来ると、随つて色々の花が咲き、また様々の蝶が出る。夏の初め、花菖蒲の咲く頃には、揚羽蝶や、黒い色の、大きな、立派な黒揚羽蝶などが花を尋ねて飛んで来る。花菖蒲のやうな色の濃い、大きな花は、斯様な立派な色をした、大きい蝶と能く釣り合つて見える。藤の咲いた時には、虻や蜂も澤山来るが、とりわけ、大きな、黒い色をした、まるくまばちが必ず来て、長い總形の花の周圍にぶん／＼鳴いて居る。其

熟 塾

の外、牡丹、芍藥、石竹、紫雲英、蒲公英、芥子、牽牛花、芙蓉、菊など、種々の花に種々の蟲が來る。昆蟲以外の動物と植物との關係は、それほど親密ではないが、又種々の原因から自ら配合されて居るものがある。例へば、果實が赤く色づいたときには、それを啄みに來る鳥類又は獸類がある。又稻の黄ばんでみをつたときには、雀が來、麥の熟した頃には、雲雀が來る。其の外、かしどり、鶉、栗鼠、貂などが木の實を取りに來たり、草の實を喰ひに來たりする。斯様に、果實や花の場合には、植物の生存に必要な爲

梢 稍

蒼 葎

に自然と配合が出来て居るのであるが、其の外の場合には、それほど深い關係はなく、唯動物が植物を色々の目的で利用して居ることから、自然其の間に聯想が起るのである。例へば、水邊にある植物は濕氣又は水を好む動物が利用することになる。彼の鷺などは河邊にある柳の梢にとまり、又螢も柳の葉に好んでとまる。又雨蛙、蝸牛なども水邊の植物や又は濕つた處にある草木の葉、莖に乗つて居る。蒲葎、燈心草の類が池の中に生えて居ると、赤蜻蛉、燈心蜻蛉などが時々來てとまる。即ち此等の場合も、水

特持

邊の植物と特別の動物との間に自ら關係が出来て居るのである。鴈・鴨などが蘆のうちに下り、金魚や鯉が金魚藻・菱・黒藻などの間を遊ぎ、水澄が蓴菜・萍などの浮いて居る水面を走り、香魚が急流を上るなどの場合でも、皆水中又は水邊の植物と自ら配合が出来て居るやうに見える。

鳥類が種々の植物に来て巢を造ることは普通であつて、或鳥は或特別の樹木を擇んで来る。又巢を造らなくても、或樹木には或種類の鳥が来て度々とまることがある。これにも又色々の原因があるので、

畫畫畫

其の鳥の來る時節と其の植物の花や實のある時節と丁度同時であつたり、又偶然にも或鳥が一の樹木に能くとまることが見たりして、それから其の木と鳥との間に聯想が起るやうになつたのである。

從來、我が邦で繪畫・詩歌などに現れ、又種々の美術品・工藝品に上つて居る動植物配合の例は色々あるが、其の普通なものには梅に鶯、松に鶴、枯木に烏、柳に鶯などの類で、これは自ら其の植物と動物との形態・性質等に於て適合する點があるか、又は偶然の場合からかく配合を取つたのであらう。(植物生態美觀)

* 素行

みづうやう
うへに無筆ひや
ヤ係 素行

河東碧梧桐
尺五寸

六 内藤鳴雪に贈る

正岡子規

拜啓先般ハ失禮仕候其の後講習に御出
になり候由河東より承り候御話ぶり巧なりと
同人の評に御座候
叔々の教を俳句に譯して御送下されたく
形もなかり候これハ豫て申上候通衆人に
やうを御つもうゆゑ教も句も當分秘密にな
し候まじしう形もなかり候
まじしうまじしうあり候 敬もまじしうあり候

よののうくたる露のしら玉
御多忙中御面倒お形も恐入候謹言

八月七日

常規

鳴雪先生

玉札下

秋庭し朝顔の花二つ咲く

とれれ木うたふりたふりし 春の川

七 川中島

天文二十三年秋の半ばの頃かとよ、上杉謙信は八千

雌雄||勝敗
||輸贏

餘騎を従へて川中島に打つて出づ。われ此の度の戦は、武田信玄を追つ詰めて、親しく雌雄を決せんと、渦巻き返す犀川を渡りて陣をぞ取りにける。信玄は之を聞くより早く、二萬餘騎にて打向ひ、砦をかためて戦はず。謙信は氣をいらち、村上義清に言ひ含め、月影暗き山々の草葉の露を分けさせて、彼方此方に兵を伏せ、樵夫に擬せし兵を出して、甲斐の兵營に近づかしむれば、甲斐の兵計略（ハカシメト）とは露知らず、朝霧の間に追ひまくる。待ち設けたる伏兵は、時こそ來れと、勝鬨をどつと揚げつゝ、引き包み、袋に物を取る如

伏||仗

龍||竜

く、一騎も残さず打ち取つたり。信玄怒つて軍勢を雲霞の如くに繰出せば、謙信も備を立て、打向ふ。龍躍つて雲を起し、虎嘯いて風を呼ぶ。勢破竹の如くにて、入り亂れ入り亂れ攻め戦ふ有様は、颶風沙を巻き、百雷巖を抜くに異ならず。越後の勢退けば甲斐の軍之を追ひ、甲斐の軍退けば越後の勢之を追ふ。軍をすること十七度、何れを勝としら（レ）ま弓引くかと思へし信玄は、一手の勢の旗を伏せ、川を渡りてよしあしの際をひそかに忍ばせて、勇み立つたる謙信が旗本近く進み寄り、面もふらず斬つて入る。麾下の

懸||懸

隙||隙

汗汗汚

軍勢は思はぬ兵に敗られて走る跡より、甲斐の兵鯨波を作りて追ひかくる。宇佐美定行之を見て、猛虎の如く憤り、汗馬を驅つて大音にわが手の勢に下知をなし、敵の横合より無二無三に突き入つて、淵瀬もいはせず追ひ落す。信玄度を失ひ、流れを亂して走る所を、謙信只一騎、赤の栗毛の逞しきに鞭を當て、豎子何所まで逃ぐるぞ。と云ひも果さず切りつくる。信玄刀を抜くに暇なく、軍配扇にて受けたれど、扇は二つに折られたり。ふると見て笠取るむまもふかりけり。

豎豎

川中島のゆふごちのゆゑ

泡沫

と歌ひし如く、二の太刀ははや肩先に切り込みぬ。あつと云ふ間に信玄が命は岩に碎かる、泡と消えなん危さを救はんとして、軍兵が心はやたけに勇めども、水はやくして近寄れず。隊將原大隅、槍をのばして謙信を突きはしたれどあだづきし、かくてはならじと槍を擧げ、唯ひとりうちにと撃ちたりしに、馬に當りて馬逸す。謙信馬を鎮めんと、手綱かい繰るその隙に、信玄は虎口を逃れ去りにけり。

鞭聲肅々夜過河。

曉見千兵擁大牙。

東山陽

劍劍

遺恨十年磨一劍。 流星光底逸長蛇。
かく信玄を打ち漏らしたる謙信が心の中や如何ならん、思ひやるだに哀れなり。 信玄は肩の痛手に耐へかねて、その夜の中に軍勢をまとめて、出づる月影に道を求めて、はるぐくとわが故郷に歸りけり。

八 人の間に答ふ

尾崎行雄

* 雑誌「精神」の記者。

記者足下。 僕、古今の賢哲英豪に於て別に偏好する所なし。 智あるものは勇なく、勇あるものは智なし。 材略に長ずるものは徳操を闕き、大節毅然たるもの

景慕—欽慕

は雄略に乏し。 要するに、皆一箇の不具人たるを免れず。 故に僕好んで古今東西人の傳記を讀むと雖も、只其の長所に就いて之を師友とするに過ぎず。 一讀爽然、景慕止む能はざるものに至つては、僕未だ其の人あるを知らず。 然れども強ひて愛好の深淺を較すれば、彼此より深きものなきにあらず。 不識庵謙信の如きは、僕が景慕心の傾注することや、深き者なり。

彼、不幸にして北陬に生れ、上國の形勢に暗し。 故に其の計圖未だ偏小なるを免れずと雖も、なほ天下を

號二号

霜滿軍營、秋氣清、數行過雁月三更。越山併得能州景、遮莫家鄉憶遠征。

席卷し、宇内に號令する志なきにあらず。特に其の豪快義侠の氣質に至つては、高く戦國の諸將に傑出す。之を古今東西に求むるに匹儔あることなし。彼既に義にして亦智、既に勇にして亦仁、加ふるに勤王の至情を以てす。天若し之に年を假さば、其の成就する所、豈越山併得能州景を賦するに止らんや。彼素より身命を賭して信玄と争ふの愚なることを知る。然れども、雄圖壯望あるがために、其の義侠心を矯抑せず、敢進勇往、人生復他望なきもの、如く然り。眞に是、援弱抑強の天使にして、亦義侠心の凝結

闊二潤

雄圖一壯圖



（藏院光量無山野高）信謙衫上

體なり。其の劍を横たへて能州の月に吟ずるに至りては、豪爽闊達、人をして覺えず、唾壺を撃破せしむ。彼をして上國に生れしめば、信長素より雄圖を逞しうする能はず、豊太閤亦陪臣を以て終らんのみ。惜しいかを、彼人和を得て天時を得ず、天時を得て地利を得ず、壯圖

未だ上國に伸びずして、將星既に北陬に落つ。是、僕が嘆惜して措く能はざる所なり。聊か鄙見を記して足下の推問に答ふ。(古人評論)

九 利根川の秋曉

徳富蘆花

先年の秋十一月の初旬ごろ、利根川の左岸の息栖（息栖）と云ふ處に泊つた。此處は利根の本流が北浦の末流と落ち合ふ處で、川幅が闊く、對岸の小見川（小見川）までは小一里もあらう。宿はすぐ水邊で、夜半に眼を覺すと、櫓の音がぎいくと枕頭に聞える。翌日、黎明（黎明）に起

常陸國鹿島郡息栖村。

下總國香取郡小見川町。

黎明 味爽

鶏 雞

カールライル
一七九一—一八六三
エマーソン
一八〇三—一八八三

きた。宿の者はまだ寢て居るので、そつと戸を明け、河邊に出ると、其處に薪が積んである。霜を拂つて腰をかけた。天地はまだほの闇い。空も河面も茫として鉛色であつた。裏の方の闇い小屋の中で、鶏が勇ましく曉を告げると、餘程たつて、川むかふの小見川の方から、いかにも微かな鶏の聲が聞えた。大河を隔て、呼びかはす此の鶏聲は實によい。チ（チ）エルシーの賢とコンコルドの哲とは實にかくの如く大西洋を隔て、呼びかはしたのであらう。自分の眼には、曉は此の兩岸の鶏聲の間から川面に湧き

物

あがつて来る様に思はれた。

暫くすると、小見川の方の空がぼうつと薔薇色になつて来た。と見ると、川面も薄紅を流してほやりほやり水蒸氣が見えて来た。實に迅い。瞬をする間もないのである。夜は川下の方へ流れて、曙の光は四邊に満ちてゐる。鶏はなほ鳴きつゞけてゐる。空と水との薔薇色が少し褪ふ。忽ちきらくるとまばゆき光が水にうつる。ふり返つて見ると朝日は杲々として今息栖の宮の森の梢を離れたのである。その梢を離れる鳥が一羽、朝日を負うて、さながら曉

泉果

を告げ渡る神使の如く、凜とした朝の天氣に羽を搏つて、小見川の方へ飛んで行く。小見川はまだ蒼々とした朝霧の中に眠つて居る。

對岸はまだ眠つて居るが、こちらの村は最早覺めた。うしろの小屋から煙が立上る。今棚を出た家鴨は足跡を霜につけて、くわつくと呼びながら、朝日を碎いて水に飛び込む。水楊の枝に小鳥が囀る。今起きて来た村人が白い息を吹きく、川に下りて、河水を掬んで口を嗽ぎ顔を洗ひ、それから遙かに筑波の方へ向いて、掌を合せて拜んで居る。「あゝ、實に好

楊揚

い拜殿である。」と自分は思つた。(自然と人生)

一〇 秋の夜

幸田露伴

月の夜は秋こそ勝れたれ。春の月の光は美しき女の童の髪のごとし。めでたきことは誠にめでたし、なつかしきことも誠になつかし。されど、猶聊か物足らぬ心地す。冬の月は水晶もて作れるものを見るがごとし。清さは餘りありて味無きに近し。夏の夜の月の團々と大いなるが、海原の果より、松の樹の間より、又は市中の叢の浪間より出てたる、目ざま

晶昌

快快

しく、心ゆくものにて、夜の景色も快くをかしけれども、たゞ、我が魂の世に浮かるゝをこそ覺ゆれ、天地の靈氣の身に浸み入るやうなるを覺ゆることなし。

秋は夜おもしろく、夜は月おもしろし。中の秋の五日六日の月のふと見る夕暮の空に出て居りて、雑木の梢、もろこしの垂葉などに風かすけく叫く、まづおもしろし。遠山黒く暮れて、素月輝を揚げ、庭樹のそれ、闊葉、織葉の葉表の照、葉蔭の闇、おのがじし畫趣を爲し、詩情を作りて、合して爽涼清澄の景を醸し出すさま、いづくにも有りふれたることながら好し。

織織

夜更け、蟲吟じて、世の中静かなる時、たまく、燈前に
 書をさし置きて、起つて、廊を歩むをりから、窓の白き
 を見て、戸をおし開きて、出づれば、月天心を過ぎて、光
 華六合に瀰り、霜に澄める夜の氣は、水まさに凍らんと
 欲するが如くなる、身心頓に此の世のものならず
 なりたるやうに覺えて、秋ならでは、夜ならでは、月な
 らではと思はる。(東亞の光)

一一 荒城の月

春、高樓の

花の宴

盃

めぐる盃

かげさして

千代の松が枝

わけ出でし

昔の光

いまいづこ

秋陣營の

霜の色

鴈

鳴きゆく鴈の

數見せて

かざす劔に

照りをひし

昔の光

いまいづこ

いま、荒城の

よはの月

かはらぬ光

たがためぞ

垣に残るは

たゞ葛

影陰蔭

松に歌ふは

たゞ嵐。

天上影は

かはらねど、

榮枯はうつる

世の姿、

うつさんとてか、

今もなほ、

あゝ、荒城の

よはの月。

(中學唱歌)

一二 わが幼時

新井白石

わが六歳の夏の頃、上松といひし人のすこし文字などありしが、七言絶句の詩一首教へてその意を解き聞かせしに、やがて誦をなしければ、三首まで教へら

七言絶句

傳傳

れしをば、人にも講じ聞かせたりき。

「この兒文才あり。いかにも師をえらびて學ばしめらるべし。」など彼の人もいひしかど、かたくななる昔人たちのいひしは、昔より言ひ傳へしことあり、利根氣根黄金の三こんなくしては學匠にはなり難し。」といふなり。この兒利根こそ生れつきたらめ、なほ幼くしてその氣根の事もはかり難く、家富めりとも見えねば黄金の事心得られず。などいひあひき。わが父も戸部の御慈しみによりて常に傍を離れまゐらせず。學に入れ師に従はしめん事もかなふべから

土屋民部
少輔忠直。
土屋侯の小
姓なり。

部陪

ず。されど、幼きより、物書く事をば戸部も人々に語り誇らせ給ひしことなれば、せめて物をば書き習はしめたくこそ侍れ。とて、わが八歳の秋、戸部の上總國にゆき給ひしあとにて、手習ふことを教へしめらる。その冬の十二月半ば、戸部歸り參られしかば、常に傍にさぶらふ事もとの如し。あけの年の秋、また國にゆき給ひしあとにて、課を立てられて、日のうちには行草の字三千、夜に入りて一千字を限りて書き出すべし。と命ぜられたり。冬に至りぬれば、日短くなりて、課はまだみたざるに日暮れんとする事度々にて、

縁緑

竊一窃

西向なる竹縁のある上に机を持ち出でて、書き終へ



新井白石

ぬる事もありき。又夜に入りて手習ふに、睡けの催して堪へ難ければ、われに附けられしものと竊に謀りて水二桶づつ彼の竹縁に汲み置かせて、いたく睡りの催しぬれば、衣脱ぎ棄て、まづ一桶の水をかぶりて衣打ち著て習ふに、初めは冷かなるに目さむる

こゝちすれど、しばし程經ぬれば、身暖かになりてま
たく、ねむくなりぬれば、又水をかぶる事さきの事
の如くす。二たび水をかぶりぬるほどには、大やう
は課をもみてたりき。これわが九歳の秋冬の間の
事なり。

かゝりし程に、この頃よりは、わが父の人に贈り給ふ
文をばかたの如くには書きたり。十一歳の秋、また
課を立てられて庭訓往來を習はしめられ、十一月に
至りて十日のうちに淨寫してまゐらすべしと命ぜ
られ、命ぜられし如くに事を終へしかば、冊になして

*
玄慧法師の
作といふ。

技
枝

戸部に見せまゐらす。襲め給ふこと大方ならず。
十三の時よりは、戸部の人と贈答し給ふ程の文ども、
大方は我に命ぜられき。
又十一歳の時に、わが父の友に關といひし人の子ど
もは太刀打ちのわざにすぐれて、人に教ふる事あり
しを、われにもこの技教へられんことを望みしに、わ
ぬし未だ幼し。此等のわざ學ばん事をほ早し。とい
ふ。「さこそ侍るべけれど、太刀使ふこと少しも心得
ざらんには、刀脇差腰にせん事誠に不用の事にや。」と
言ひしかば、のたまふところ誠に然なり。とて、一つの

後鳥羽院
思ひ出つす折
杖と杖あうたけ
不うちふふ
うかー忘れが
なす

わざを傳へて習はしめたり。かゝりし程にその年十六になりし者のわれと藝を試みんといひしかば、木刀をとりて三たびあひて三たびまで勝つ事を得たりしにぞ、人々もまた興に入つて笑ひける。

(折り焚く柴の記)

一三 岐路

處 処

時しも歳の暮れの方、一人の老人が窓際に立つてゐた。彼はまづ悲みの眼を舉げて深き蒼空を望んだ。其處には清き穩かな湖の面に白百合の浮べる如く

孰 孰

多くの星が列んで居た。彼は次に俯きつゝ、眼を地上に投じた。其處には幾多の男女がゐて孰れも皆其の目指す方なる墓場へと歩を運ばせて居た。しかし此の老人のやうに、望を失つた憐れな者は一人も居なかつた。

最早此の老人に取つては、此の世の旅路も其の終りに近づいて居る。此の旅路から齎し來つたものは、過失と後悔との他には何もない。彼の健康は破れ、彼の思は亂れ、彼の胸は悲しみ、彼の望は葬られた。今や彼の若い時分の有様が、ありくゝと眼の前に浮

蝮
蝮

んで來た。思ひ起せば彼の父が彼を人生の岐路に置いたあの大切な時があつた。右なる路は平和な光明な土地に續き、其處には黄金なす穂は野に溢れ、歡樂の歌が空に響いて居る。左なる道は迷へる者を導いて深い暗い洞穴へ入らしめ、之に陥るときは再び出ることが出來ない。其處には毒氣が充ち満ちて蛇蝮の類がしゆうくと聲をあげて匍ひ廻つて居る。

老人は空を仰ぎ、苦みに堪へないで、聲をあげて、

あゝ若き時よ、歸れ。おゝ父よ、再び我を人生の岐

併
併

路に置いて善なる路を擇ばしめ給へ。

と叫んだ。併し、彼の若い日も、父の命も、共に過ぎ去つて無いものであつた。

彼の眼の前の暗い沼の上に、光がさまよふと見る間に遁れ去つた。彼の空しく費えた一生は恰も此の如きものであつた。一の星が光を曳いて空に流るよと見る間に、やがて闇の中に消え失せた。彼の一生はよく之に似て居る。思へば悔いても及ばぬ悲みに胸も張り裂ける心地がする。

次に彼は相共に人生の旅路に上つた幼時の友を思

擔
檐

ひ出した。友は徳義と勤勉との路を進んだので、今や此の歳末の夜にも榮譽を擔つて幸福に過して居る。其處なる寺の高い塔から大時計が鳴り響いて、彼の耳に落ちると、彼の兩親が彼の墮落を悲しみ、彼を戒めた言の葉、彼の爲に捧げた祈禱など、親の恩愛がしのばれて來た。恥と悲みとに心を抑へ附けられて、最早彼の父の住む天津御空の方を眺めることが出來なくなつた。彼は空しくもがきながら、聲高く叫んだ。

歸り來れ。我が若き時よ。歸り來れ。

すると、望の如く若い時は歸つて來た。前の悲みは唯歳末の夜の一場の夢であつた。彼は未だ若かつた。唯彼の過失のみは事實であつた。彼にはまだ時がある。彼はまだ深い暗い洞穴へ入り込んで居なかつた。黄金なす穂が日影に搖ぐ國に赴いて勤勉の報として豊かに之を刈り取ることも自由であつた。彼は熱い涙を流して之を神に謝した。今をほ人生の入口に立つて、右せんか左せんかと迷へる人よ。深く心に記せよ。汝の年去りて、汝の足

實
實

の暗き山路に躓くとき、汝は悲しみ痛みて叫ばん、併し其の甲斐もなく空しく叫ばん、おゝ若き時よ、歸り來れ。おゝ我に再び若き日を與へよ。

と。(少年鑑に據る)

一四 境遇

境遇カ我、境遇ヲ作ル。
用アル鍵ハ常ニ光ル。
一桃腐リテ百桃ヲ損ス。

桃一挑

兔一免

天ハ自ラ助クル者ヲ助ク。
二免ヲ追フ者ハ一免ヲモ得ズ。
數多ノ朋友ヲ有スル者ハ一ノ朋友ヲ有セザル者ナリ。
自ラ高クスル者ハ卑クセラレ、自ラ卑クスル者ハ高クセラル。

一五 岩倉右府その一

井* 上 毅

月日の小車は旋り旋りて流るゝ水よりも早く、故右府公の世を去り給ひしより、今ははや十年餘りぞ過

* 教育救護
之 其 原

五條聖文

ぎぬる。
 *大詔のまに、我が國を富士がねの安きに置か
 やはと思ひ入り給へる公の一筋の誠心は天地の
 間に満ち渡りて、窮みなき後の世まで語り繼ぎ聞き繼
 ぐべければ、今更に言ふまでもなきことながら、公の
 逸事の一二を思ひ出づるまゝに書き記して、世の鑒
 ともし、史人の料にもなさん。
 維新の初に神武の古に復るといへる大義を定めら
 れしはこの公の輔翼の力にぞある。碩學野々口隆
 正氏の説に、建武中興の振はざりしは、當時の搢紳に

*石見の人、國學者。

明治二十年五月
 政は始りて
 朕を祖とせし懐
 高朝の外に祖
 以て文を先と
 徳を尊とせし
 を庶幾せず

高朝の人

卿郷

その人なかりしによれり。源親房卿は學識ありて
 時の帝の御覚えもめでたかりしかど、その人の所見
 は延喜天曆の跡に復るにありて、神武の古に復る事
 を知らず。さてこそ公家武家の間に隙を生ぜしな
 れ。といへり。
 御朝足

延延

故右府公は搢紳有職の家に生ひ立ち給ひしかど、夙
 に大勢を達觀して王政に公武の別なきことを看破
 し、中興の實を擧ぐるために神武の古に復るといへ
 る一大義を倡へ給へるは、これぞ明治の朝廷に人あ
 りとは申すべき。この一大義は百揆庶政の原動力

となりて、藤原氏以來千有餘年間の盤根錯節をば總べて破竹の勢を以て破りたり。世の人は、明治の中興は五百年來の武門の政を破りたるなりと思ふらめど、心ある人は、溯りて天平以來の宿弊の更に破り難きを破られたることを知るならん。

徳川氏の大政を返上せし際には、公は譴を蒙りて久しき間岩倉村に蟄居し、天日をも見給はざりしが、俄に召によりて夜中參内し給ひけり。このをり、公は一の大囊を携へて宮門に入り給ひしが、囊中の文書は皆公の蟄居中に計畫せられて、玉松操といふ人に

慶應三年十月十四日。文久二年九月龍居落飾の命を蒙り采地なる山城國愛宕郡岩倉村に蟄居せらる。京都の人、勤王家。

物論—物議

起草せしめられつる復古經綸の策案なりき。



岩倉具視

*慶應三年十月王政復古の大令下る。

この時大勢なほ定まらずして物論紛々たるに、公は俄に躬を以て責に當り、從容應答して、雄藩の主も爲に容を改め、朝議大いに決するに至る。而して大令一度發して、外は將軍を廢し、内は攝關議奏傳奏を廢し、親政の洪圖を旬日の内に定め、後世動かすべからざる基礎を建てられたるは實に公の輔翼の力なり。就中復古の

弊一幣

第三日に、禁闕に達文を掲げられて女房の請謁を納るゝことを痛く禁止せられたるは、これを數年の宿弊を除き、將來のために一大美事を遺したるとて、公の晩年に親しく物語し給ひき。此の一事は扇の要なりとは、知る人ぞ知らん。

玉松操は一の偉丈夫なりき。平生聲色を近づけず、酒肉を嗜まず、書を読むを樂みとなし、夙に神武復古の説を抱きぬ。偶、公に知られて蟄居の一室を貸し與へられ、起居を俱にして畫策する所あり。公は玉松の功を推して、「己の初年の事業は皆彼の力なり。」と

慇懃一殷勤

までのたまへり。薨去の前年に、一夕ことさらに余を召して玉松の履歷を物語し給ひ、その人の功績を空しくなせそ。書き記して後の世の語り繼ぎの料とせよ。」と慇懃に仰せられけり。此の夜、余は他の二人を誘ひて是に侍りしが、その中の一人は漏れなく公の物語を筆に留めたり。己の功を推して人に譲り給ふこといとめてたし。

辭一辭

その後、公の朝廷に勧めまゐらせて、斷然と開國の國是を執らるゝに及びて、玉松は姦雄に誤られたり。」との一語を言ひ放ちて公の許を辭し、召されても應へ

五千人
 五千人
 千八百
 大久保利通
 木戸孝允
 小松清廉
 廣澤真臣

だにせず、一室に屏風をたて籠め、その中にて讀書に
 日を送りけるが、功を論じ賞を頒つ日に逢はずして
 世を去りぬるを歎かはしきと公ののたまひし。
 公は蟄居していましなから、その家の裏の隠戸より
 人知れず大久保木戸小松廣澤等の諸名士を引きて
 内外の大勢を談論せられ、此の時已に鎖國の非なる
 ことを悟らせられつるに、玉松は露ほどもこの事を
 知らざりけり。彼が口惜しく思ひつるも理なりき。
 (梧陰存稿)

贊

大
 久
 保
 木
 戸
 孝
 允
 小
 松
 清
 廉
 廣
 澤
 真
 臣

一六 岩倉右府その二 井上 毅

維新後の公が翼賛の功は明治の大御史と俱に後の
 世に傳ふべきなれば、こゝに書きつゞくる要なけれ
 ど、公は己の勞を露ほども誇りがほに人に語り給ふ
 ことなかりしほどに、史人もえ知らぬことぞ多かめ
 る。世の人は明治二十年と二十二年との條約改正
 中止の件をば、何某の盡力にてとなりし、かくなりし
 などを、事々しく言ひはやせど、この事のおこりは十五
 年にて、公はあかす思召すことありて一方ならず心
 を盡し給ひ、そのをり一たび中止とはなれり。され

森有禮
不みう行
偶像の崇拜
刑をこころる

せむいふ
蕭牆の憂
凡庸

*江藤新平。

ども公は深く秘め給ひて、文書一箱ほどもあるを家に藏めて出さざりしかば、内々の人ならてはえ知る者なかりき。此等は後の人の鑒にこそ。剛膽は政事家の第一要徳なりとぞ聞ゆる。公は長袖の人とも覚えぬばかりに剛毅の徳を備へおはしけり。征韓の議、今にも蕭牆の内に變亂を見んとする時に、陸軍將校の中にて武勇の聞えある一人は公の邸に参り、客室に謁見し、一應二應議論の末、その人怒れる眼血をそゞぎ、毛髮倒に立ち、脇差を左の手にて鞘も撓むばかりに握りつめ、貴殿若し意見を枉げ

岩倉右府
先生
魚
水

隱

給はずば、御身のために悪しかりなん」と言ひ放ちつ。膝と膝との間一尺ばかりにまでつめかけたり。此の時、公の家の侍ども次の間に控へ居て障子の隙より窺ひつゝ、あはやと手に汗を握りたりしに、公は少しも動ずる色なく、自若としてその座を守り給ひきとぞ内の人の物語りし。公のかしこきあたりの御覚え殊にめでたかりしは世の人の知る所なるが、大君の御爲とならば、我をおきて人はあらじ。と思ひ給へる隠さはぬ明き心の深かりしは、これぞ君臣水魚とも申し奉るべきか、雲の

衛 衛

上の事は筆に載するも畏ければ洩しぬ。公は大久保故内務卿と心交特に深くおはしき。岩倉村蟄居の折より、大久保卿は密々の往復しきりなりしが、公の身の上心もとなし。とて、夜なく、年少き侍を遣はして守衛せさせつることありしを、公は知り給はざりき。西南の亂平ぎし後、兩公の間に契り合ふ事ありしが、日ならざるに大久保卿の遭難とはなりぬ。一日、公の物語に「世の人、大久保の志を知りたらんにはいかばかりか哀しみ思ふらん。維新のはじめ十年間は創業撥亂の時なりき。これより後

三十九 大久保
三十一 桂
三十二 大久保
三十三 大久保
三十四 大久保
三十五 大久保
三十六 大久保
三十七 大久保
三十八 大久保
三十九 大久保
四十 大久保
四十一 大久保
四十二 大久保
四十三 大久保
四十四 大久保
四十五 大久保
四十六 大久保
四十七 大久保
四十八 大久保
四十九 大久保
五十 大久保

時代改

祖 租

十年こそは内治を整理し民利を進むる時なれとて、將來のために大いに計畫する所ありしに、料らずもかたみの言葉とはなりぬ。とのたまへり。公は夙に開國の國是を唱へ給ひつゝ、又厚く國體の基礎を重んじ給ひき。晩年公の奏上によりて宮内省に帝室制度取調局を設けられしは、祖宗遺訓の貴きことを世に知らせん爲の計らひとぞ聞えし。公は勤儉の二字を大政の本として輔弼に心を盡させ給ひき。又家を治むるにも儉約を旨とせられ、台鼎の高き位に上り給ひし後も、岩倉村の蟄居の時を

大久保
勸業神道
銅碑

三十九 大久保
三十一 桂
三十二 大久保
三十三 大久保
三十四 大久保
三十五 大久保
三十六 大久保
三十七 大久保
三十八 大久保
三十九 大久保
四十 大久保
四十一 大久保
四十二 大久保
四十三 大久保
四十四 大久保
四十五 大久保
四十六 大久保
四十七 大久保
四十八 大久保
四十九 大久保
五十 大久保

準準

を忘れそ。』とて常に公達を戒め給ひけり。薨去の前、家範を作り、後の世まで守り文にせよ。』とて子孫に遺し給ひしが、その附録一篇は専ら奢侈と遊惰とを戒め給ひ、重き病の牀にまし／＼つゝ親しく旨を授けて侍ふ人に筆執らせ給ひし條にぞある。一門の人が案文に調印せしは七月十五日にして、薨去の前五日なりけり。今はの際に遺言ありて、己の墓石は父君の墓石の寸法に準へよ。』とありきとなん。公は日に夜に公の事にのみ心を碎きて、寸時も餘りの暇あらせ給はざりき。朝五時前には目を覺し、侍

*井上毅

やある。』と聲かけさせ給ひ、今日は何某をば何時に召せ。次に、何某をば何時に呼べ。又明日は何某に、何時に來れ。何某に、夕何時に參れ。』と記して申し遣はせ。など仰せられき。多くの公達は父君の代筆として、文かくことに忙しかりきとなん。公の病に侵され給ひつるは明治十六年の春なりしかど、後より思へば、十五年の頃より何となくあらざらん後の世の心づくしの節々を知る人に語らせ給ひしことぞ多かりける。同年の冬、或人のもとに贈り給へる書の末に、

きりやととちやる浦の藻鹽草、
 たがれり多とてつぎはぐらん。
 とぞありし。先だつも後るゝも世の習とはいひな
 がら、御國のために行末を思ひやられし公の心こそ
 いとあはれなれ。

公の平生の仰に、大臣たるものはその身の進退によ
 りて節操を二つにすべきにあらず。維新の功臣、晚
 節を全くせざるもの多きぞ口惜しきことの極みな
 る。われこそ躬を以て人臣の標準は示さめ。とのた
 まひしが、病重らせ給ひし後、辭表を捧げん事を思ひ

井上臣

押狎

立ち給ひ、同僚の諸卿が支へ止めまゐらせしも聽き
 入れず、是非にとて歎き請ひ給ひしかば、上には忝く
 も誠ある意ばへを酌ませ給ひ、聞き届けさせ、厚き惠
 ちの御敕をさへ下し賜ひ
 けり。かくと承りて、公
 はさしにも重き衾を推
 し退け、涙に咽び、天恩の
 忝きを拜謝しつゝ、急ぎ
 家の子等を召し集へられ、今日こそは病の輕きを覺
 えたれ。それ盃まゐれ。とて酒を賜ひけり。人々歡

井上臣
 岩倉具視筆蹟
 (井上上子爵家藏)

幻一幼

の色をなしたりけるが、さてその翌日に事重らせ給ひぬるぞかひなき。今はの際まで、夢幻の間に、公の事のみ心に懸けさせ給ひ、なからん後の事までも人もて雲の上に聞え上げまゐらせしこともありきとぞん。

余は本末の序もなく思ひ出づるまゝに書き續けぬ。あはれこの文讀まん人々よ、なき人のかきやりつる藻鹽草をいやつぎくにかづきあぐべき丈夫の伴となりて、公の地下の靈を百載の後にまで慰めよかし。(梧陰存稿)

本朝初

閣一閣

一七 八道の山

大町 桂月

八道の山よ、いざさらば。年の七年、戈執りて、踏み荒したる日の本の益荒雄は、今歸るなり。釜山の浦の秋ふけて、空もしぐる、夕間暮。波路遙かに帆を揚げて、汝と今や別るなり。知遇の恩に身を捨て、四百餘州をわが駒の蹄に蹴んと勇みしも、覺めて儂なき夢なれや。我を知りにし太閤の、世になき後は、誰が爲に千里の外に戈執りて、異境の山にいくさせん。

恥をしのひて故郷に

歸るも、後に死ななため。

主君の家の行く末を

思へば重き命なり。

嗚呼、太閤世を去りて、

よつぎの主は幼し。

石田・小西の小人ばら

かならず事を誤らん。

わが幼時より育まれ、

恵にあみし豊臣の

家を護りて死なん身の、

永くは住まじ、世の中に。



(藏寺國本都京) 正 清 藤 加

魂一魄

跡に見捨つる益荒雄の

亡き魂、若しも知るあらば、

三途の川や六道の

辻にしばらく我を待て。

是を限りの見納めに、

今一度と見返れば、

波音すごく、雨荒れて、

野山は霧に朧なり。

八道の山よ、いざさらば、

國の譽とた、かひて

花と散りにし日の本の

男子の骨を護れよや。

(黄菊白菊)

一八 浦鹽より

太田 覺 眠

拜啓野衲は川上事務官と共に最後の引揚船にて

一八 浦鹽より

七三

出帆―拔錨

歸朝致志き者中上置候處西伯利内地奥深く
 入込み居る同胞は諸河結氷のため各路の交通全く
 断絶致候候今日如何なる手段を取ら引揚船出帆の
 期日迄に當港へ到着の見込到底いれなく幾百の同胞は
 餘儀なく残留する事に相成申候今後全く本國の保
 護を頼りて心細く敵國內に残留する同胞の心情を察し
 る時は野衲は如何にしくも此の憐むべき同胞を棄て
 歸朝するに忍びを断然敵國內に踏留は事に決心致候
 野衲が此の事を事務官に申出たるとき事務官は野衲
 の行為を以て政府の命令に背くものなりとて憤を以て

險―嶮

諫められし且曰く君は露國政府の保護に安んぜん
 とまほすと野衲曰く予は露國の保護に安んずるものに
 あらばその危険に甘んぜんともするものなり今や貴官は
 居留民が唯一の頼とする帝國の國旗を収めて此の地を
 引拂けんとも今後残留の同胞はそれ誰を頼まん
 予は身僧侶として此の人々の境遇を見つ船に上は
 こと能はざる素より死は疾くは覺悟せりと事務官
 は突然起つて野衲の手を執つて曰く予は最早君の
 志を沮止せざるはべし予は國民に代つて君の高義を
 感謝を予は我が政府に對し君一人を見殺にする

沮―阻

用意準備

責は甘んじて之を受けん君をふ佛陀の大悲を發揮せよと相對して思ひを感涙に咽ぶやあつて曰く旅路遼遠なり其の用意ありやと野衲曰く一片の丹心一軀の尊像是我が爲に千萬の味方なり而して囊中尚百金の餘財ありと事務官直に囊底を拂つて巨額の路銀を恵まれ且慰問僧の証明書を交附せしめ尚種々の注意を與へしめ候旅順開戦の事は已に聞得たり當港には戒嚴令を布し候ゆゑ最早日本人の居位を許されず唯今事務官一行の乗込め引揚船を見送りたる後には當

擅壇壇

港に日本人とは野衲唯一人にて候目下露人の暴行よりは寧ろ支那勞動者が家財を奪けんとし襲來し勢甚だ猖獗を極め居候野衲一人の力到底之を防ぐに由なし今夜は須彌壇の下に隠れて一夜抜明し彼等の掠奪を擅にせしめ明朝一番汽車にてハヴロフスクに到り順次黒龍江沿岸地方に残留する同胞を歴訪慰問致さべく候野衲素より生還を期せし候へども唯此の上は一日にては永く命を保ち一人にても多くの人々を慰問しなき心願に候野衲の此の行必が大慈の御冥見ありと給ふを確信

致候遠に東方を望み

陛下の御安泰を祈り

奉り候 匆々

明治三十七年二月十三日浦塩新徳港棧橋にて

太田覺眠

一九 武藏野

國木田獨歩

昔の武藏野は萱原のはてなき光景を以て絶類の美を鳴らして居たやうに言ひ傳へてあるが、今の武藏野は林である。林は實に今の武藏野の特色といつてもよい。即ち木は重に檜の類で、冬は悉く落葉し、

檜
猶

獨歩全集

擬人法

丘
岳

春は滴るばかりの新緑が萌え出る。其の變化が秩父山脈以東十數里の野一齊に行はれて、春夏秋冬を通じ、霞に、雨に、月に、風に、霧に、時雨に、雪に、緑陰に、紅葉に、様々の光景を呈する。其の妙は一寸西國地方又は東北の者にはわかりかねるのである。檜の類だから黄葉する。黄葉するから落葉する。時雨が私語く、風が叫ぶ。一陣の風が小高い丘を襲へば、幾千萬の木の葉が高く大空に舞つて、小鳥の羣の如く遠く飛び去る。木の葉が落ち盡せば、數十里の方域に互る林が一時に裸體になつて、蒼ずんだ冬

段一般

の空が高く此の上に垂れ、武藏野一面が一種の沈靜に入る。空氣が一段澄み渡る。遠い物音が鮮かに聞える。自分は十月二十六日の日記に「林の奥に坐して、四顧し、傾聽し、睇視し、默想す」と書いた。此の傾聽といふことがどんなに秋の末から冬へかけての今の武藏野の心に適つて居るだらう。秋ならば林の中より起る音。冬ならば林の彼方に遠く響く音。鳥の羽音、囀る聲。風のそよぐ、鳴る、うそぶく、叫ぶ聲。叢の蔭、林の奥にすだく蟲の音。空車、荷車の林を廻り、阪を下り、野路を横ぎる響。蹄で落葉を蹶散らす

幽寂—閑寂

音、これは騎兵演習の斥候か、さなくば夫婦連れて遠乗に出かけた外國人である。何事をか聲高に話しながら行く村の者のだみ聲（Murmur）、それも何時しか遠ざかりゆく。獨り淋しさうに道を急ぐ女の足音。遠く響く砲聲。鄰の林でだしぬけに起る銃音。（件々）ことに時雨の音に至つては、これほど幽寂なものはない。山家の時雨は我が國でも和歌の題にまでなつて居るが、廣い野末から野末へと林を越え、杜を越え、田を横ぎり、又林を越えて、しのびやかに通り過ぎる時雨の音の、如何にも幽か（オヤシイ）で又鷹揚な趣があつて

優しく懐かしいのは、實に武藏野の時雨の特色であらう。

自分が嘗て北海道の深林で時雨に逢つたことがある。これは又人跡絶無の大森林であるから、其の趣は更に深いが、其の代り、武藏野の時雨の更に人なつかしく私語くが如き趣はない。(武藏野)

絶無—皆無

一九〇〇年中行事

物集 高見

我が國にては式日大祭日には國旗を門戸に掲げて祝意を表し、一家團欒して冷酒を飲み、赤飯を食ひ、業

一般—一斑

を休むを一般の習慣とす。

さて、新年には、門に松と竹とを立て、注連繩・齒朶・交讓木・橙などを飾り、牀の間には三方に載せたる鏡餅のこれも齒朶・交讓木・小松・海鰻・橙などをもちて飾りたるを据ゑ、神棚・靈屋にも注連繩を延べ、齒朶・交讓木を飾りて小さき鏡餅を供ふ。かくて、一日より三日までは、一家、一堂に集りて雑煮の餅を食ひ、屠蘇の酒を飲みて新年を祝ふ。なほ昔の式に依れる人は七日に若菜の粥、十五日に小豆の粥を食ひ、十一日には具足開きとて鎧に供へたる餅を煮て祝ふことあり。

歸飯歸

養父入

また十六日には、奴婢に一日の暇をとらせて里に歸りて遊樂するを許すことあり、これをやどおり又は藪入といふ。七月の十六日にも亦この事あり。さて又歳の始めには、産土神ウツチノカミ氏神及び先祖の墳墓に參詣し、又親族知人の家を訪ひて新年の祝詞を述べ、かくて、童子は紙鳶をあげ、童女は羽子をつき、夜に入りては雙六フタヒロかるたなどして戯れ遊ぶ。又萬歳といふもの、素袍ソウボウ烏帽子のいでたちにて鼓を打ち、扇をならし、大紋の袖を翻して、家ごとに萬歳を唱へあるく。三月三日は、昔は上巳の節として艾餅アヒコを食ひ、桃花の酒

三月三日
五月五日
七月十五日
十月十五日
正月十五日
三月三日
五月五日
七月十五日
十月十五日
正月十五日
三月三日
五月五日
七月十五日
十月十五日
正月十五日

盂盂

を飲み、五月五日は端午の節として粽チマを食ひ、菖蒲の酒を飲み、又菖蒲を屋上に挿して祝ひたりしが、今は太陽曆にて桃も菖蒲もまだしければ、その事は大かたやみ、たゞ三月三日には童女の節供として牀に雛人形を祭り、五月五日には童男の節供として門に幟紙鯉ウツをたつることゝなれり。七月十五日は中元として親族の往來あり。又この日は盆として先祖の靈祭あり。盆はもと盂蘭盆にて佛家の行事より出でたるものなり。十三日より始めて十六日に終る。盆中は墓前靈前に蓮の葉に盛り

ついで
ついで

除_二徐

たる強飯を供へ、香を焚き、燈籠をともす。九月九日は重陽の節供として、昔は菊花の酒を飲み栗子の飯を食ひたりしが、今は季節の異なるためにこれらの物なければその事なし。十二月は歳暮の月なれば家々に煤掃の事あり、又新年に用ふべきために餅つきの事あり。かくて三十日の夜は除夜といひて一年の終なれば、神棚、靈屋には神酒、神饌を供へ、家族一堂に集り、夜半過ぐるまでは起き居て、一年の間にありし事どもを語りあふ。十二時を過ぐるほどよりは、此處彼處の寺々にて百

巨ハク類
惱

鶏_二雞

鬼遣

八の鐘といふを撞きならして、歳の既に暮れたるを報ず。鐘の數漸く積れば、八聲の鶏鳴きかはし、紫だちたる雲東天にたなびきて新年の日輪輝き出づ。昔は此の夜、追儼といふ事ありしかど、今は節分の夜に「福は内、鬼は外」とさけびて熬豆もて戸障子を打つことゝなりしが、これもこの頃は漸く稀になりゆけり。(日本の人)

*十二月二十五日。

二一 クリスマスと新年 巖谷小波

* クリスマス即ち基督誕生祭は、いはゞ西洋の正月で、

姉||姉

一年中で一番楽しい、そして一番賑かな時である。さて自分はまだ新參者であるから、さほど贈物の心配はいらなかつたが、それでもこの祭には前夜及びその晩とも招待されて、とにかく家庭におけるクリスマススマスの景況を一通り見ることが出来た。面白いのは此の贈物の獻酬で、親は子に、夫は妻に、主は婢僕に、兄は弟に、姉は妹に、それ〴〵思ひ〴〵の物を贈る。それと同時に、又子からも、妻からも、婢僕からも、弟からも、妹からも、親に、主に、兄に、姉に、それ相應の贈物をする。かくて互にその喜ぶ顔を見る

持物

羨||羨

貧||貧

與

のを無上の樂みとして居るさまは、よその見る目も羨ましい程である。殊に感心すべきは、この地の子供が、諸方よりの贈物の中に同じ品があると、その一つを残しておいて、他はこれを近處の貧乏人の子に與へる事だ。それにちやんと日をきめて、豫め貧乏人の子へ案内狀を出し、その子供等の來る日には、少しも親の手を借らず、自分が主人役となつて、いろ〴〵御馳走をした揚句、それ〴〵贈物を與へてかへす。これは日本の子供には殘念ながらまだ見られない美風である。此

新参者
にひびり
あつた
か
とを
を

二〇 クリスマスと新年

八九

舊||旧

の通り、西洋のクリスマスは日本の正月で、町もこの時に賑へば、人もこの時に浮かれ立ち、衣服もこの時に著飾れば、家屋もこの時に掃除して、一切面目を改める代りに、肝腎な正月には別に變つた事もない。たゞ目新しく思はれるのは新年に移る年の關の景況だ。全體日本で考へると、大晦日はいくら更けても矢張舊年の中に算へ込み、初日が上つてからでないといふ新年の心地はしないのであるが、西洋は例の理窟の國であるから、初日の上るのを待つて居ない、苟も十二

三十一日
大晦日
附
附
附

菩提樹と譯す。

新年おめでたう。

月三十一日が經つて一月一日の午前零時になれば、すぐに新年と心得てしまふ。で、宮城の參賀もこの時刻に行はれ、市民は又この午前零時をもつて一同に戸を開き、又は表へ飛び出して、誰でもかまはず逢ふ人ごとに新年のよろこびをいふ。殊にリンデン廣小路はベルリン目貫の處であるから、此處へ押しかけていつてプロージット、ノイヤールと呼びまはる連中が頗る多い。かく申す自分もその連中の一人で、當夜五人の同志と連れ立つてリンデン廣小路へと繰出した。行く

警護—警衛

と何さま人の山、銀金具の兜を頂いた巡査は馬上いかめしく路次を警護し、四方八方から寄せ來る羣集を巧に同方向へのみ進ませて、何の事はない、この廣小路に大きな走馬燈を拵へさせた。て、我等もこの走馬燈中の人物となつて、面白半分に押し合ひ揉み合ひ、名も高きリンデン樹下を二まはりほど廻つたと思ふと、辻の大時計は時を違へず忽ち十二時を打ち初めた。すると、その時計を合圖に、幾萬とも知れない口からプロージット、ノイヤール、プロージット、ノイヤールが續けざまに鳴り出した。その聲の凄

雷—電

じさ、時ならぬ雷が百も重なつて一時に落ちて來たかと怪しまれる許り。吾等は煙にまかれながら、同じやりにプロージットを叫んで前に押し、後に返しする中に、忽ち同伴の一人を失ひ、果ては帽子も揉み潰されさうなので、遂に一方を切り抜け、辛うじてその渦中を出た。其の時、不圖聞くと後の方でぼかんとぼかんといふ音がする。何かと思つて見返れば、これは誰やらのシルクハットが今しもしたゝか打たれたのであつた。この夜、シルクハットを被つて出る者は片端から打つてよいとは、古來の吉例寧ろ奇

例であるのだ。中には又打たれてもかまはぬやりに、わざと紙の高帽子を被つて揚々として行くのも見かけた。要するに、打つ者も悪意でなければ打たれる者も怒りもせず、寧ろその縁起を喜ぶ位だ。「處かはれば品かはる。」なんと面白い風俗もあればあるものではないか。(洋行土産)

二二 鴻門の會

大町 桂月

*函谷關。

楚の懷王諸將に約すらく、まづ秦を破りて關中に入らんものを其の王とせん。と。劉邦まづ入りぬ。も

陣―陳

と懷王は項羽を嫌ひて劉邦を愛し、邦をして進み易き路を取らしめたれば、苦戦もせず易々と入ることを得たるなり。項羽は正面攻撃をなして最も苦戦し最も功勞ありたるが、關中に入ることは邦より後れたり。關閉ぢたり。是、邦の閉せる所なり。羽怒り、關を破つて入り、鴻門に陣す。その兵四十萬、百萬と號す。邦の兵十萬、霸上にあり。羽謀臣范增の言を聞いて、邦を殺さんとす。邦はその謀臣張良の言に従ひ、良と共に百餘騎を率ゐて往いて謝す。ここに邦にとりて仕合せなりしは、羽の叔父の項伯が

茲茲

良の親友なりしことなり。良の身を氣の毒に思ふより、その主の邦をも氣の毒に思ひ、一方には増の謀を良に洩して來り謝するやうにせしめ、一方には羽をなだめて、茲に鴻門の會は起りたるなり。

羽と伯と東嚮して坐し、増南嚮して坐し、邦北嚮して坐し、良西嚮して坐す。項羽の怒りしは邦の左司馬曾無傷の中傷に由ること明かになりて、事一先落著し、今や酒宴正に盛なり。されど雷雨歇みたる空なほ暗し、いつ霹靂を生ずるかも知るべからず。増はあくまでも邦を殺さんとす。羽は猛勇鬼をもひし

默點

げど涙もろき人なり。増、羽に目くばせして、佩びたる玉玦をあげて之を示すこと三たびに及べども、羽默然として應ぜず。増出でて項莊を呼ぶ。項莊入りて壽をなし、畢つて劔を抜いて舞ふ。項伯も亦起つて劔を抜いて舞ひ、邦を蔽ふを以て、莊撃つことを得ず。あゝ危いかな。

張良急いで軍門に至り、樊噲を見る。噲問ふ、今日の事如何。良告ぐるに事の急なるを以てす。さらば我請ふ入つて死を共にせん。とて、劔を帯び盾を擁して軍門に入らんとす。衛士拒んで入れず。噲、盾に

嘗ツ臆

て突き倒して入り、帷をひらき、西嚮して立ち、目を張つて項王を視る。頭髮堅立して目眦悉く裂けたり。羽曰く、客は何者ぞ。良曰く、我が君の侍士樊噲といふ者なり。羽曰く、壯士なり。やがて大盃に酒をなみなみとつぎて飲ましむ。噲拜謝して起ち、一呼して飲みつくす。肴にとて生の豚肉を與ふ。噲、盾を俎にして劍を抜いて切つて食ふ。羽曰く、またよく飲むか。噲曰く、臣死をだに避けず、一斗や二斗の酒何ぞ辭するに足らん。夫、秦は暴逆なりしを以て天下之に叛けり。我が君まづ秦を破つて咸陽に入り

佞

廁ツ廁

秋毫も侵す所なく、宮室を封閉し、還つて霸上に軍し、以て大王の來るを待てり。殊更に將をやりて關門を守らしめたるは、他の盜賊の出入と非常とに備へたるなり、大王を拒まんとせるに非ず。勞苦して功高きこと此の如し。然るに未だ封侯の賞あらずして卻て妄人の言を聽いて有功の人を殺し給はんとす。是、暴秦の二の舞なり。臣ひそかに大王のために取りらざるなり。羽未だ答へず、たゞ坐せよ。といふ。噲、良の側に坐りぬ。間もなく、邦去つて廁に行き、噲を手招きして共に出づ。

壁—壁

羽、陳平をして邦を召さしむ。邦曰く、「挨拶せずして還るも失禮なり。如何にかすべき。」噲曰く、「大行は細謹を顧みず。今や他は刀俎にして、我は魚肉なり。何ぞ挨拶するを要せん。」とて終に虎口を脱れ出でぬ。良を留めて、よき頃を見計らひて入つて羽に謝せしめて曰く、「我が君もと酒量なし。今日大王の饗をうけて飲み過し、苦しみの餘り挨拶をもなさずして歸られたり。臣をして代りて謝せしめらる。白璧一雙大王に上り、玉斗一雙范公に獻る。願はくは我が君の心をうけさせ給へ。」羽問ふ、「劉君は今何處にか



豎—豎

ある。」良答ふ、「大王あまり酒を強ひ給ふを以て、身を脱してひとり去られぬ。今は霸上に到られたるならん。」羽、璧をうけ座上に置き、餘念なし。范増は玉斗を受けしが、之を地に置き、劔を抜いて突き碎いて曰く、「あゝ、豎子共に謀るに足らず。將軍の天下を奪はんものは必ず劉邦ならん。」と。

英雄豪傑謀臣勇士一堂に會し、殺氣紛々たる間に樊噲の勇一座を壓し、痛飲健啖、口を開いて虹霓を吐く。鴻門の會は實に宇宙有數の一大快事なり。(我が文章)

この書は餘四磨公子附の女中頭へ遣はせるもの。齊昭の生母お家の方。齊昭の第十子昭訓。嘉永五年齊昭藩士の爲に水戸城外の細谷村に設けたる砲術練習場。

二三 公子の躰方を申し遣はす

徳川 齊昭

餘寒の處、その地子供等、緑の間に障なきは一段の事に候。去る二十七日、餘四磨事、神勢館へ行き候由、是よりは歩行又は乗馬にて度々行き候が宜しく候。朝も未明より起き、水にて顔を洗ひ、薄著にて庭などに出て、子供相應いたづら致候が宜しく候。風を引き申すべしなど申して、用心致させ候は以ての外に候。とかく武士の子は手強く、手あらに成長致し申さず候うて

は、追ひく成長の上、公家や町人出家の様に成

忠孝天二
文武不岐
學問事業
不殊其效

(徳川齊昭筆蹟水戸弘道館記碑)

り行き、天下の御爲を致候様に相成らざるゆゑ、何分にも手強く體を幼年より鍛へて育て候様に致したく候。さて、文武共に出精致させ候が宜しく候。文武を勵まし、それにて死に候ほど

の子は惜しからず候へば、死に候うても苦しか

勵し勵

*餘四磨附きの女中の名



(藏館物博室帝京東)昭齊川徳

らず候。他家へ養子に遣はし候うても、柔弱にて、文武これなき者にては、水戸家の外聞宜しからず。死に候は、誰にても一度は死に候者故、外聞宜しからざる子供が成長致候位に候はゞ、死に候方はるかに勝り候故、表の附の者、竝に伊勢等へも申

*天保十年齊昭、水戸の西郊に偕樂園を開き、中央に好文亭を建つ。

し聞け候うて、前文の通り、手あらく仕立て候うて、文武を勵まし申すべく候。奥にても、附の者に申し聞け候うて、讀書のさらへ等をよくく致させ申すべく候。晝は、文武稽古の間は、前文に申すごとく神勢館又は好文亭等へ歩行致候が宜し、又相手などと竹刀打致候が宜し。子供の大人の如く致居候は身のこなれ悪しく宜しからず候。如才はこれあるまじく候へども、序にまかせ申し遣はし候。牛乳は人乳をやめ候程の子供は誰が用ひ候うても宜し、毎朝取立の

水戸藩醫松延眞雄。同本閉讓。齊昭の第七子慶喜、弘化四年出て一橋家をつぐ。

乳を吞ませ申すべく候。一人にて五勺か一合も吞み候はゞ足り申すべく候。これは松延本間等へ申し談じ候が宜し。一橋よりも今以て日々取りに來り、一二合ばかりづつ遣はし申候。何よりも牛乳に越し候藥はこれなしと存候也。なほく、餘四磨始め、毎朝の水は只今にても浴び候事と存候。若し浴び申さず候はゞ、浴びせ申すべく候。さるかはり、湯はつかはせ申すまじく候。

二四 他山ノ石

他山ノ石以テ玉ヲ攻ムベシ。
桃李言ハザレドモ、下自ラ蹊ヲ成ス。
男子ハ當ニ死中ニ活ヲ求ムベシ、坐シテ竊スベクシヤ。

道近クトモ行カザレバ至ラズ、事小ナリトモ爲サザレバ成ラズ。
富貴モ淫スルコト能ハズ、貧賤モ移スコト能ハズ、威武モ屈スルコト能ハズ、コレヲ大丈夫トイフ。

二五 乃木將軍

森 鷗 外

一

つはものゝ 武勇なきには あらねども、

眞鐵なす ベトンに投ぐる 人の肉。

往く者は 生きて還らぬ 強襲の

鋒を しばし轉じて、 右手のかた、

圖上なる 標の高さ 二零三、

巔の 二つ聳ゆる 石やまに

たえぐの 望のいとを 懸けてこそ、

きのふけふ、 軍の主力を 向けてしか。

往 往

柳 抑

我をいばるる日ある
中納言盛久はうらやまき
す思ふを言ふは強兵人
時日多敷く消費しつ
海軍も亦あつた
昔阿術師、
浪おすも根乳、
氣味、
弟方、
多智を第、
上、
此、
の、
は、
先、
多、
三、
寺、

(誌雜紙手) 蹟筆典希木乃

二

霜月の 三十日の

夕まぐれ、 將軍は

高崎山の 師團より

たゞ一騎、 柳樹房なる

本營に 歸らんと、

曲家屯をぞ 過ぎたまふ。

ほの暗き 道のほとりを

見たまへば、 身うち皆

血に塗れたる 卒ありて、

背脊

そびらには、はやこときれし 將校の
亡骸を かきのせてこそ 立てりけれ。

三

「汝は誰ぞ。 何を何處にか 負ひてゆく。」
聞召せ。 背負ひ奉るは 奴わが
主と頼む 乃木將軍の 愛兒なり。
年老いし 將軍の家の 二人子、
そのひとり 勝典ぬしは いちはやく
南山に うたれ給ひて、 残れるは
おとりの 保典のぬし ひとりのみ。

背負へるは その一人子の 亡骸ぞ。

四

父君は 心を、しく 我が主をも



乃木希典

ひと時に 營め。」と宣り 隊附の
まゝにあらせて、
「討死の 身の果は
おのれと三人、 葬をば
給ひしを、

旅族

人々の	強ひて計らひ	つるにより、
さいつ頃	友安旅團の	副官に
職かはり、	まだ程經ぬに、	この朝開、
あへなくも	空しき骸と	なりましぬ。

五

果てまし、	處は高地	二零三。
目鏡もて	敵の備を	望みます
うら若き	額のたゞ中	打ち貫かれ、
ひと言を	のたまはん	ひまもなく、
持口の	南の峯に	うせたまふ。

その骸を	奴背負ひて、	この村に
ありと聞く	野戦病院	たづねれど、
くるほしき	心からにや	たづねえず。

六

かくいふを	駒をとめて	聞きました、
將軍は	病院の旗	ある方を、
鞭あげて	「彼方にこそ。」と	さし給ふ。
面ざしは	たそがれ時に	見えねども、
目ざとくも	雲の絶間ゆ	覗ひし、
さむ空に	まだ輝かぬ	冬の星、

更ま闌らんけて、友ともなる星ほしに、
「將軍しょうぐんの
睫まゆ毛げだに、動うごかざりき。」と
語かたりけり。

(うた日記)

倣なま倣なま

二六 武士道の權化その一 井上哲次郎
武士道といふものはいつの時代より起つたか、これ
はどうも言ひ難いのであります。遡さかのつて考へます
るに、既に日本の神話の中にも武士道の淵源と見倣
すべきものがないではありません。その後、大伴氏・
佐伯氏などは帝室の護衛をして、大いに武士道の精

衰おとろ衰おとろ衰おとろ

神を養成して居りました。併あしながら、武士道が殊
に大いに發達して來たのは、鎌倉時代よりの事であ
ります。その後も多少の盛衰はありましたが、これど
も、徳川時代に至つて大成したのであります。
武士道は日本民族尙武の氣象と共に發達して來た
もので、誰が武士道を唱へ出したと云ふわけのもの
ではありません。従つて嚴密の意味で言ひますれ
ば、勿論祖師と云ふものはないが、こゝに一人武士道
の祖師と言つても宜しいほどの人があります。そ
れは山鹿素行であります。何故に私がかく云ふか。

祖う祖う

羅一權

其の主意を明かにしたいと思ひます。山鹿素行は名は高興、一の名は高祐、山鹿甚五左衛門と云ふ名で世間には傳つて居ります。素行は丁度徳川時代の初めの頃の人で、林羅山の門人でありま
す。併しながら、素行の學問は羅山とはまるで正反
對の方へ進みました。素行は又其の頃の學問とい
ふ學問には、悉く通じて居たと言つても差支のない
程に博學でありました。それのみならず、素行は一
方に於ては又武藝に精通して居て、當時此の道に於
ては第一流の地位を占めて居りました。

幕一慕一慕



山鹿素行

それで當時の有様を考へますれば、素行の如きは實
に不世出の人傑であつたと云ふ事は疑がありません。
彼が幕府に忌まれたと云ふのは、只彼が非常の
人傑であつたがためであ
る、如何なる椿事が彼より
して起るか、と幕府は大い
に彼を恐れたのでありま
す。それがために、彼は何等の罪もないのに、赤穂に
流される事になつた。固より何の罪もありません

抵
抵

けれども、直接の原因となつたのは外でもない、それは素行が聖教要録と云ふ一小冊子を出版したからの事だ。聖教要録の中に、素行は大いに朱子學を攻撃したのであります。朱子學を攻撃すると云ふことは、其の頃では尋常の事ではない、それは幕府の教育主義を根柢より覆す事であつて中々大膽な所爲であつた。そこで不届なる書物を出版したと云ふ廉で、放逐される事になつたのであります。素行が流された當時の模様は彼の著した配所殘筆の中に委しく書いてあります。此の書物は素行が

略
畧

赤穂に十年居ましたのちに書きました、今で申しますれば自傳であります。是が素行の事蹟を見るに、最も確な書物である。其の大略を申しますれば、寛文六年十二月三日の事である、素行は突然北條安房守より呼出状を受取りました。受取るや否や、是は決して唯事でないと考へまして、直ちに行水をし、食事をしまひ、立ちながら一篇の文章を書いて、それを懷中に收めて、北條安房守の處に參りました。處が、安房守から申渡がありました。其の申渡は他の事ではない、其の方は不届なる書物を出版したが爲に

赴趣

侯一候

赤穂に御預けになる。と、かう云ふ申渡である。そこで又、斯様な命令である以上は、もうすぐに播州赤穂へ赴かなければならぬが、何か家に思ひ置く事があるならば、どうにもしてやらう。と云ふ事を安房守が申された。素行答へて、拙者は何も家に思ひ置く事はござらぬ。拙者は平生、家を出る時には、最早再び家へ歸らんでも宜しいと云ふ決心をして居ります。それ故決して思ひ置く事はござらぬ。と申しました。それから赤穂へ出發する事になりました。素行は其の前に九年間ほど赤穂侯に仕へて居たこ

御一却

とがあつたから、赤穂の君公を始めとして臣下に至るまで、卻て彼を師として尊敬しました。其の頃、大石良雄などもどうやら素行の門人となつて教育を受けられたらしく思はれます。さうして、彼は奇妙な事を豫言して居ります。其の豫言と云ふのは、かう云ふ事であり、自分は赤穂に仕へて優待を受けたのであるが、是と云ふ手柄をして居らぬ。けれども、將來何か、茲に人倫の變に遭遇する事があつたならば、自分の教へて置いた成績が必ず現れるであらう。と、かう云ふ事を豫言して居

享享

る。それは先哲叢談にも出て居ります。延享三年六月十五日、素行は赦されて江戸に歸りました。幾何もなく彼は病身になつて次第に衰弱し、歩行不自由となつて、到頭貞享二年九月二十六日にたふれました。年は六十四歳でありました。其の葬式は實に盛なものであつたと云ふ事が古い記録に見えてゐます。牛込榎町の宗參寺と云ふ寺に葬りました。その墓は今に至つても儼然と存して居るのであります。(教育公報に據る)

二七 武士道の權化その二 井上哲次郎

齋齋

私の考では、素行は武士道の權化と云ふべき人であります。なぜかと云ふと、當時仁齋とか徂徠とか有力な學者が數多ありましたが、素行のやうに兵法に精通して居つた者はない。徂徠なども兵法を講じましたが、全く机の上の兵法であつて、素行のやうに兵法を實際學んで來たと云ふのではない。どういふ學者にしても、素行ほど兵學に精通して居つた者はない。それから又兵法家と云ふものはなか／＼大勢ありました、併しながら如何なる兵法家と雖も、

研 節

素行ほど廣く學問をやつた者はない、それは決してない。其の上に武士道の淵源とも言ふべき神・儒・佛の三教に精通して居つた者は、外には勿論ないのであります。素行は最も合一し難い處の兵法と學問とを合一したのであります。武士道と當時の學問とを併せて、是を一身に有したのであります。武士道はずつと太古より次第に起つて來ましたけれども、素行のやうにそれを研究して書きあらはした者はない。即ち素行以後に素行のやうな者がなく、素行以前に素行のやうな者がないのであるから、私は

節 節

素行は武士道の祖師と言つて宜しいと信じて居ります。

それで武士道に就いて素行の言つて居る處を一二御話致しませう。素行は死節と云ふ事を説いて居

其疾如風 其徐如林

應需 山鹿素行書 (流芳遺墨)

る。武士は一度自分の家を出たならば、歸るまでは自分の家の事を思つてはならぬ。家を出るや否や死を決して居らなければならぬ、即ち何時死んでも

效効

差支ないといふ決心を以て家を出なければならぬと云ふ考であります。素行は一舉一動死を決して世に處して居るゆゑ、まことに強い處がある、一命を賭して自分の志を貫いて居るのであります。

又遺言の教といふがあります。其の頃の大名は往死に臨んでから子孫に遺言をする。素行は大いにそれを誠めて居ります。「死ぬ時に遺言をするのは間違つて居る。武士に取つては、平素の一言一行悉く遺言でなければならぬ、平素の行が正しくなくて死にぎはになつて遺言した處が效力はない」とか

う云つて居る。其の邊の身を處する考と云ふものは潔白と云はるか、峻烈と云はるか、實に此の上もな

い高尚なる道德の觀念であります。

又一日の教といふがあります。人の一生は永く積つた處が百年である。其の百年は一年より成り、一年は一月より成り、一月は一日より成る。一日と雖も、もつと押詰めて言へば、一時一刻となる。故に時刻々から自分の正しき行を積んで、さうして一生の行の完き事を期さなければならぬと云ふのであります。これがやはり武士道である。武士道を只

詰詰

腕力のみと思ふのは大間違、全く實行に適切なる一種の道德であります。それからして、素行が教育上に大いに力を盡したと云ふ事は、彼が赤穂に流されて十年居つた間の事蹟によつて證すべきである。さうして、素行は其の前九年間赤穂に居つたのであるから、前後通じて十九年の間、十分赤穂の教育に力を盡したに相違ありません。その後全く素行が豫言した通り、浅野家に意外の事變を生ずる事になつたのは亦不思議な事ではありません。さうして彼の大石を始め義士の事蹟

裂—烈

は全く武士道の精華であります。その武士道の精神が爆裂して秋霜烈日の如き事蹟を遺したと云ふのは實に淵源のある事であります。あゝ、云ふ事は一時の怒に乗じてやつた事ではない、前からして悉く計畫してやつたのである。それらは全く素行の平生の教育が與つて力ある事と思はれます。實に素行の教育上の事蹟と云ふものは決して少なくありません。さうして素行の教育はそれで止つたものと考へてはならぬ。義士の事蹟と云ふものは後の日本人の頭腦に至大の感化を及して居るのであ

る、義士の事蹟を讀んで感動しない者は一人もない、
 義士の墳墓に謁して感動しない者は一人もない。
 して見れば、素行の教育は、我が國の存續する限り、直
 接に間接に偉大の感化を全國民に及すといつても
 差支なからうと信じます。(教育公報に據る)

學中國文教科書卷四終

卷四

文部省檢定 中學國語教科書
 大正元年十二月廿四日

明治三十九年十月十五日印刷
 明治三十九年十一月八日訂正再版印刷
 明治三十九年十一月十一日訂正再版印刷
 明治三十九年十一月十二日訂正再版印刷
 明治三十九年十一月十三日訂正再版印刷
 明治三十九年十一月十四日訂正再版印刷
 明治三十九年十一月十五日訂正再版印刷
 明治三十九年十一月十六日訂正再版印刷
 明治三十九年十一月十七日訂正再版印刷
 明治三十九年十一月十八日訂正再版印刷
 明治三十九年十一月十九日訂正再版印刷
 明治三十九年十一月二十日訂正再版印刷
 明治三十九年十一月廿一日訂正再版印刷
 明治三十九年十一月廿二日訂正再版印刷
 明治三十九年十一月廿三日訂正再版印刷
 明治三十九年十一月廿四日訂正再版印刷
 明治三十九年十一月廿五日訂正再版印刷
 明治三十九年十一月廿六日訂正再版印刷
 明治三十九年十一月廿七日訂正再版印刷
 明治三十九年十一月廿八日訂正再版印刷
 明治三十九年十一月廿九日訂正再版印刷
 明治三十九年十一月三十日訂正再版印刷
 大正元年一月一日發行

中國文教科書全拾册
 定價 各金三拾錢
 價一皇軍 各金二拾五錢



編者 吉田彌平

發行所 東京市神田區裏神保町六番地 上原才

發行所 東京市神田區裏神保町六番地 光風館書店

關西專賣所 大阪市東區淡路町四丁目四十二番地 大阪寶文館



本館發行之教科書は常に多數の製本準備有之候に付萬一各地賣捌所に賣
 切等にて課業に御差支の節は直接御注文被下候はゞ直ちに御送附可致候

今科言其自甲組

林靜